RSウイルス流行期における退院時の注意点－当院の現状から指導を見直す－

Advice at discharge in RS virus epidemic season － Reconsider the guidance of our hospital －

西４階病棟
赤堀千文　太田まさえ　上條陽子

〈要旨〉今回当院の現状から，RSウイルス感染症予防指導について検討した。2011年当院で出生した新生児の多くは正期産児であった。母親への調査ではRSウイルスを知らない母親が多かったが，産後入院中に感染予防指導を行っているスタッフは少なかった。RSウイルスを予防するためには，母親がまずRSウイルスについて知る必要があると考えた。そこで2012年10月よりRSウイルス感染予防指導を開始した。指導対象は出産した母親全員とした。今後指導は１年を通して行っていく予定である。また指導するにあたり，スタッフの知識に差があるため，指導開始前には基本的な知識を情報提供する必要がある。

キーワード：RSウイルス，指導，新生児

Ⅰ．はじめに

RSウイルスは小児が罹患する呼吸器感染症の代表的ウイルスであり，毎年秋から冬にかけて流行する。早期産児，基礎疾患を持つ児，生後6か月以下の乳児が感染すると重症化しやすく，特に乳幼児期の初感染は重症化する傾向がある。RSウイルス感染症に対する有効な治療薬が存在しないことから予防が重要であるといわれている。今回当院の現状を振り返り，感染予防指導について検討した。

Ⅱ．研究方法

1．2011年の分娩数，早期産児の出生数，小児科入院児数を調査した。
2．2012年8月に当院に入院していた患者54名（初産婦27名，経産婦27名）にRSウイルスの認知について聞き取り調査を実施した。
3．スタッフに対し，指導開始前後（9月，12月）で感染予防指導に関するアンケート調査を行った。またRSウイルスの基本的な知識（流行期，感染様式，症状）について調査した。

Ⅲ．倫理的配慮

対象者には調査は自由協力であること，個人が特定されないようにすることを口頭で説明し了承を得た。

Ⅳ．結果

1．当院の現状

2011年の分娩数は838件であった。そのうち在胎36週未満の早期産児は48名であり，全出生数の5.7％であった。小児科入院はNICU72名，GCU150名であった。小児科入院児の21％が在胎36週未満で出生した児であり，小児科入院児の多くが正期産児であった。当院で出生し，当院小児科で管理されている児のシナジス投与率は98％であった。

RSウイルスについては重症化のリスクが高い，早期産児，先天性心疾患など基礎疾患を持つ児に対し，小児科医師より退院時に説明が行われていたが，看護スタッフからの指導は行われていなかった。

2．母親のRSウイルスの認知度

8月に入院していた患者54名（初産婦27名，経産婦27名）に聞き取り調査を実施した。

①RSウイルスという言葉を聞いたことがあるか？（図１）

初産婦，聞いたことがある19％，聞いたことがない81％，経産婦，聞いたことがある67％，聞いたことがない33％という結果であった。初産婦で聞いたことがあると答えた人は「子どもがいる友達から聞いた」「本やテレビで見た」という人が多かった。経産婦は「上の子が感染した」「小児科で聞いた」「母親同士の会話」という人が多かった。しかし今回の出産が3回目，4回目であっても聞いたこと

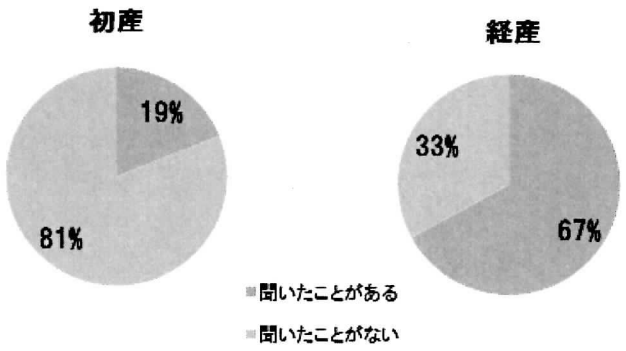

図１　RSウイルスという言葉を聞いたことがあるか？

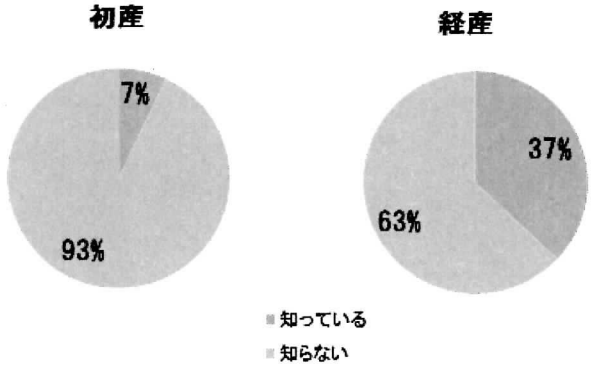

図２　RSウイルス感染症がどんな病気か知っている？

がないという人もいた。

②RSウイルス感染症がどんな病気か知っているか？（図２）

初産婦，知っている7％，知らない93％，経産婦，知っている37％，知らない63％という結果であった。初産婦で知っていると回答したのは，医療関係者であった。経産婦の中にはRSウイルスという言葉を知っていた人でもおなかの風邪と思っている人が数名いた。その他母親からは，「子供の病気については気になるが，妊娠中・産後は自分と赤ちゃんのことで毎日が精一杯。調べる余裕がない。」という意見があった。

３．スタッフアンケート

①指導開始前（図３）

（1）育児沐浴，産褥家族計画指導の中で，感染予防指導を行っているか？

指導していた24％，していない76％という結果であった。指導内容は，人ごみを避ける，手洗い・うがいをするが多く，その他家族に感冒症状があるときは注意するなどであった。

（2）感染予防指導は必要だと思うか？

必要だと思う97％，思わない3％という結果であった。必要だと思う理由は，「そこまで考えが及ばない人もいるため」「病院で聞かなければ聞く機会がないため」などであった。必要だと思わない理由は，「正常なお産で生まれた子でも指導が必要なのかわからない」との意見があった。

②指導開始後

2012年10月よりRSウイルス感染予防指導を開始した。指導はRSウイルス感染症と予防について書かれたパンフレットを使用している。指導を行い困ったことはないと全員が回答した。しかしパンフレット以外のことを聞かれたら答えられるか心配との意見があった。

RSウイルス感染予防指導実施時期に関しては1年を通して必要82％，流行期のみでよい18％であった。流行期のみの理由は，実感がわく，指導効果がありそうなどであり，1年を通して必要の理由は，基本的なことなので知識としてあるといいと思う，出生時期は異なってもリスクは同じように感じるためなどであった。

４．スタッフのRSウイルスに関する知識

RSウイルスの流行期，感染様式，症状について調査した。流行期は37名中36名が秋から冬と答えた。感染様式は接触・飛沫感染であるが，37名中7名が空気感染と答えた。症状に関しては，呼吸器感染症だが，呼吸器症状が出てきていない人が37名中6名いた。中には下痢という回答もあった。すべて空欄であったり，はてなが書かれていたりすることもあり，スタッフにより知識に差がみられた。

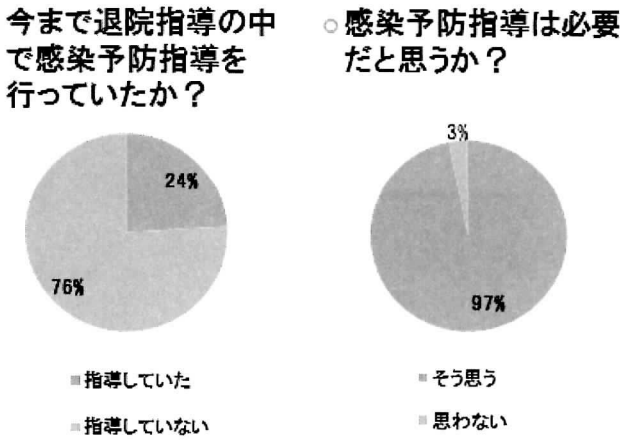

図３　スタッフアンケート

V．考察

RSウイルスは秋から冬にかけて流行する感染症の中で，頻度，重症度ともに最も注意が必要なウイルスといわれる。しかし当院で出産する母親たちのRSウイルスの認知は低い。また産後の集団指導の中で感染予防指導を行っていたスタッフは少なく，RSウイルスに対する指導は行われていなかった。感染症の予防にはまず正しい知識を持ち，適切な予防対策を行うことが重要である。児の一番近くにいる母親が予防対策を行えるように，まずRSウイルスについて知ることが必要である。感染のリスクが高い流行期に退院する場合，入院中に情報提供を行い，RSウイルスに関する知識を持って退院することが必要だと考えた。また生後6ヶ月以下の乳児は重症化のリスクがあり，特に生後間もない罹患は重症化しやすいため，早期産，正期産に関係なく，出産した母親全員を指導対象とする必要があると考えた。

スタッフアンケートからは感染予防指導は必要であると回答したスタッフが多かった。また指導時期も1年を通して必要と考えているスタッフが多いことから，流行期に限らず指導を行ってもよいと考える。

今まで感染予防指導を行っていないスタッフが多かったため，今回指導を開始したことは，スタッフ自身のRSウイルスに対する知識の向上と，感染予防指導の意識を持つ機会につながったと思われる。指導をするにあたり，RSウイルスの知識が不足しているスタッフもいる。自ら学習することが第一だが，初めて指導を行う際には，基本的な知識について情報提供する必要があると考え，今後の新人スタッフへの指導項目へとつなげていく。

Ⅵ．結語

1．RSウイルスを知らない母親が多い。
2．早期産，正期産に関係なく，母親に対しRSウイルスと感染予防について情報提供を行い，知識を持って退院してもらうことが必要である。
3．感染予防指導は1年を通して，産後の集団指導に取り入れていく。
4．感染予防指導に必要なRSウイルスの基本的な知識を，スタッフに対し情報提供する。

参考文献

・岡田賢司　退院後の周産期ウイルス感染対策－RSウイルスと喘息－　周産期医学　37（12）　1599－1603　2007
・山口文佳，楠田聡　RSウイルス　周産期医学　41（3）　399－403　2011
・渡部晋一　呼吸循環の基礎知識と退院後のRSV感染対策　ペリネイタルケア　28（11）　2009